

ワークスタイルの多様化を支える雇用のセーフティネットの現状と課題

The present condition and the subject supporting diversification of a work style of a safety net of employment

神奈川大学大学院 経営学研究科
国際経営専攻 博士前期課程

野 澤 淳 平

要 旨

本稿「ワークスタイルの多様化を支える雇用のセーフティ・ネットの現状と課題」を説明するために、まずは、章ごとの流れをおおまかにまとめておく。

1章「雇用環境の深刻化の現状と背景」では雇用環境の現状分析をしながら、現在の労働環境、労働市場において、失業状況、離職者の状況を考察することが目的である。ここでは、雇用環境の実際を各種統計や事例をあげながら現状を把握し、今現在の雇用環境の状況をつかむ。

項目を挙げると、1、産業構造の変化と空洞化、2、規制緩和策の効果、3、公共投資の減少と民間投資の低迷による建設業や他の産業の不振、4、消費低迷、5、高い賃金支払い、6、企業経営の不振と倒産、7、労働市場のミスマッチと7つの分析をおこなう。

2章「年齢階層別の雇用環境」では前章を掘り下げるかたちをつくる。主に失業者に焦点を絞り、雇用のセーフティ・ネットの対象者を規定することが目的となる。対象者は若年層と高年層層である。多様なワークスタイルを推進するであろうと思える2つの層についての考察を深める。

3章「雇用のセーフティ・ネットの現状と課題」では、主な雇用のセーフティ・ネットの役割を考察する。政府（国）、企業、個人の3つの要因がそれぞれ抱えた問題点を把握し、雇用対策の現状に付加されるべきと考えられる項目につなげて考えてみたい。

4章「セーフティ・ネットとしての「ワークシェアリング」」では、ワークシェアリングの日本における有効性を検証する。政策として議論にあるワークシェアリングが雇用のセーフティ・ネットとして有効に活用するかを考察することが目

的である。

5章「変化する社会におけるセーフティ・ネット構築に関する考察」では、社会的な変動と、その中で求められるセーフティ・ネット構築に関する関わりを考察する。今後求められるセーフティ・ネットを考える際に、社会状況と、セーフティ・ネット整備の関係は無視できないと考え、セーフティ・ネット構築に欠かせないと思われる現状を分析したい。主に、IT化や人材の流動化が雇用に与える影響について考察したい。

6章「雇用のセーフティ・ネットに求められる社会的連携」は本稿における結論として位置する。その中で、項目としては①個人の役割②企業の役割③政府の役割、と3つの分類をおこなう。目的は、「雇用のセーフティ・ネット」を構築する際に、各機関の役割が明確であり、個人・企業・国（政府）の3者が連携した危機意識のもとに雇用対策をおこなうことが本来のセーフティネット（安全網）のありかたとして望ましいと思われるからである。つまり、前提としては個人が雇用問題の主役として存在している。しかし個人を取り巻く環境が現在激しく変動しており、各機関（企業・政府等）の役割が明確になっていることが、早急な雇用問題の解決への糸口になると考えられるのである。

以上が研究方法と方向性になるが、雇用問題に関する政策や指針は研究最中にも次々と変化を遂げることが予想される難点がある。この点を考慮して必要な部分では先行研究や統計に頼った。雇用を把握するうえでは、一連の雇用に関する流れを把握することが必要だと感じるものであり、その点を先行研究または統計によって補えると考えた。

そして、「今後の課題」として、本稿から得た視点を土台に今後どのような方向をもって研究をすすめるのかを述べる。

本稿の目標またはキーワードとなるものは「セーフティ・ネット」という概念である。「セーフティ・ネット」とは予測出来ない事態に対応することの出来る社会活性化のための手段であり、特に雇用に関してのセーフティ・ネット構築は急がなければならない現状であるという現実を見据えることにある。そこから表出する危機感を、社会的連携によって安心感に転換する方針を打ち出す方法を模索したい。

現在進行中の「雇用のセーフティ・ネット」構築によって、如何に働きやすい社会を構築するかという問題を考えるにあたり「働きやすさ」といった概念には、多様化するワークスタイルを支える社会整備という観点が必要と考える。雇用に関する考え方がさまざまな意味で多様化している現状を捉えて、安心して生活できる雇用環境を構築し、個のもつ能力を十分発揮させることが出来るような、社会的連帯感のある充実した社会生活に本稿が少しでも寄与できれば幸いと考えている。

また、私個人の研究としても、本稿が土台となり、職業人生を歩んでいくうえで振り返ることが出来るものであるとともに、今後の自分の研究にも貢献するものにしたいと考えている。